

ことができます。

酒造りの順路とは別に「震災の部屋」というスペースがあり、震災直後の、大きな桶やさまざまな道具が壊れて散乱した酒蔵の様子リアルに残されていて、酒造りと震災の両方のリアリティを感じることができます。職人たちが大事に使っていたということが感じられる年季の入った道具と、震災の無惨な姿の両方をリアルに感じることができ、物づくりに対する「人」の存在を強く感じることで展示に仕上がっていました。いずれ機会を作ってインタビューしてみたいミュージアムでした。

<http://www.hakushika.co.jp/museum/index.htm> ■

古田ゆかり プロフィール(?)

最近、圧力鍋料理に凝っています。根菜料理もおこわも圧力鍋なら早くできておいしいということを実感。特に休日の朝、米から炊く中華粥にぞっこんです。干しエビと干し貝柱、ネギにしよゆにごま油、そしてピータン。これに熱いウーロン茶があればなんにもいらない！ってくらい幸せです。中華ちまきもおすすめっ。

プロジェクト報告 科学技術評価プロジェクト 量子化機能素子「評価報告書」 を読み比べて

プロジェクトメンバー 尾内隆之

春の合宿からだいぶ間があいてしまいましたが、6月22日(土)に、合宿で決まっていた宿題をみなで持ち寄って勉強会を開きました。その宿題は、「量子化機能素子研究開発プロジェクト」について経済産業省が作成した評価報告書を読み比べ、問題点・疑問点を拾い上げるというものでした。また今回から、吉澤剛さんが新たにメンバーとして加わっていただきました。吉澤さんには、この欄を担当するときにあらかじめ自己紹介していただくと思いますが、科学技術政策について研究している方で、大きな戦力となってくださるはずですよ。

●勉強会(6/22)の内容

6月22日には、その吉澤さんも初参加で2ヶ月ぶりに勉強会をもちました。各自の自己紹介・近況報告と合わせて、最近の半導体研究開発の動向について藤田さんが情報を提供してくれました。現在、当プロジェクトで追っている「量子化機能素子研究開発」は、半導体に関する「国策」であるわけですが、民間の側でもさまざまな企業提携や統合によって国際競争力を再び取り戻そうとしています。競争力低下に対する企業の危機感と悩みは深刻で、そこに官の予算獲得合戦が絡んで巨額の税金が不透明な印象を残しつつばらまかれていく、という構図は相変わらず続いているようです。こうした構図はあちこちにあるはずで、そこに市民の側から風穴を空けていく方策を探り出さねばなりません。

まず、宿題となっていた「量子化機能素子」評価報告書の比較・分析について、各自の見方をつき合わせて議論しました。メンバーの共通認識として、「評価書」と言いつつも「評価」の体をなしていないことが指摘されました。「評価」の基準や方法を単純に一般化できないという難しさはあるにせよ、その難しさを克服していこうとする姿勢が何ら伺えない「評価書」には、やはり大いに疑問を感じざるを得ません。その原因には、評価にあたって外部の目を反映させようとする意識の欠如が挙げられます。評価部会のメンバーは、もちろん外部の研究者やジャーナリストですが、その発言は、できあがった評価書になると実に無難なところに収束しています。実施主体が評価にあたってもしニアティブを取る、という「内部評価」の限界は、私たちが読んだいくつかの評価書からも如実に見て取れます。

当プロジェクトの進め方については、これ以上「評価書」のみを読んでいてもさほどのアウトプットは期待できないことから、いよいよ積極的に「外へ出よう」という方向になりました。具体的には、研究開発プロジェクトを立ち上げる合意が、どのようなシステムの中で、どのように形成されていくのか、市民にもわかるように見取り図を得たいということ。また、実際に「評価書」がどのような作業手順で、誰の責任の元に「作文」されていくのか、文字だけでは伝わってこない事情をさぐる。この二点を切り口として、関連人物へのインタビューも行おうと考えています。特に、研究開発のテーマがどのような経緯で選ばれるのかは、市民にとって非常に見えにくい部分ですが、外部からの「評価」を考える上では、まずここを把握しなければなりません。〈官僚－研究者〉コミュニティの内幕を、市民にとって有益な形で明らかにする作業に取り組んでいきます。

もちろん、可能な限り研究開発資金の流れも追いたいのですが、こちらは情報入手がかなり困難と思われ、今後の検討課題となりました(どなたか良い知恵をお持ちの方、ぜひアドバイスを！)。

●新藤宗幸著『技術官僚』(岩波新書)の紹介

春の合宿のときにも注目したこの本について、簡単に紹介します(あ、「おもしろブックス」にとっておけばよかったかな……。この本は、政治学分野でも「コロンブスの卵」と言われています。行政の作用を、官僚の「資源獲得戦略」との関わりで分析する視点の重要性は、つねづね著者が強調していることですが、技官の役割をこうした視点から分析した仕事はこれまでほとんどなかったからです。「技官の王国」といった言葉はこれまでも聞かれてきましたが、その技官の役割が、具体的に官僚の「資源」拡大戦略の中でどう機能し、公共事業や薬害事件にどう結びついているのかを明快に記述しています。つまり、企業の論理と官僚制の論理に相同性があるとすれば、それはまずもって自己保存・自己拡大への欲求にあるわけで、行政を市民や企業との関わり方のみから批判することどまらず、官僚

機構のリソース拡大欲求という自律的な面にも目を向けなければ、有効なオルタナティブは提示し得ないこととなります(私は大学院のゼミで直接著者の講義を受けたのですが、この点は本当に繰り返し聞かされました)。そして、「技官の王国」を解体していくためには、やはり外部からの評価の目が不可欠で、それを制度として構築していくことを著者は提案しています。その方向を、市民の側からも積極的に肉付けしていくことが求められていると言えるでしょう。土曜講座の皆さんには、ぜひ一読をおすすめします。■

尾内隆之プロフィール

連れ合いと SOHO ワーカーとして日銭をかせぐ傍ら、修士論文の準備をする日々です(日本の社会運動と政治の関係について考えています)。最近はその間に「育児」という大仕事も加わり、毎日が東京ディズニーランドの STAR TOURS のようです。ああ、目が回る……。

第 141 回土曜講座 博物館見学 + 研究発表

「ノーベル賞の 100 年」から考える

20 世紀の科学技術 に参加して

141 回の土曜講座は、上野の国立科学博物館に 10 人が集い瀬川嘉之さんの案内で上記展覧会を見た後、東京工業大学で科学史を研究・教育されている梶雅範さんにノーベル賞の様々な側面について講じていただきました。■

「ノーベル賞 100 周年記念展」のガイドより 瀬川嘉之

今回、上野の科学博物館における上記展示会のガイドをする機会が偶然に近い形であり、科学や技術と社会について考える上で、自分自身にとっては得るところが多かった。科学博物館や科学館についても、「科学館プロジェクト」になかなか貢献できないので、この経験が生かせればと考えている。3月の春休みから6月の初めまでの土日を中心に、科学史を専攻する学生3名と交代だったので、合計14、5日ほど、午前と午後1日2回、各1時間で2フロアにまたがる展示会場の映像シアターを除くほぼ全体のガイドツアーを行った。

この展示会は、スウェーデンのストックホルムに100周年でできたノーベル博物館が常設展とほぼ同じ物を世界各国への巡回展示用に製作し、平和賞授与国のノルウェーに続いて日本で開催、次は韓国ということになっている。授賞式や晩餐会の雰囲気、金のメダルや賞状などで賞の格調を感じさせ、創設者アルフレッド・ノーベルと各賞選考機関の紹介、この100年を10年ごとに実物と新聞記事と映像で紹介するコーナー、全受賞者の顔写真と受賞理由の表示等で構成されている。展示全体

の解説パネルは英語を主としていて日本語訳をつけたわけだが、デザインを統一するために文字が小さく、また、音声やパソコンでの展示に訳がつけられなかったので、来場者の展示に対する不満はそのあたりに多かった。しかし、パソコンの特にゲーム等は子供が英語でも気にせず楽しんでいるのに少し驚いた。「創造性と文化:個人と環境」というテーマに沿った約3分×32人の受賞者「個人」のインタビュー中心の映像と約10分×8ヶ所の研究所や都市といった賞を生む「環境」のイメージ映像は日本語字幕がついて好評であり、関連して翻訳された図録もよく売れていた。

日本では特に科学博物館が東大講師の岡本氏の協力で、日本人受賞者10人の業績関係品や自筆史料、子供の頃の作文や工作を展示し、また、50年を経過した選考文書に見られる日本人の被推薦者の展示を加えた。初の受賞者湯川とその同級生朝永について旧制高校時のテストの点数や朝永がライバル湯川を気にする滞独日記、最近の受賞者白川、野依の研究内容を紹介するコーナーにスペースを割き、これらは多くの関心を引きやすかった。ノーベル賞推薦依頼を受けその意図を汲んで的確な推薦をした長岡半太郎は科学博物館にコレクションがあり、その紹介ができたのもよかった。

ガイドツアーの1回の参加者は10名から15名のことが多く、途中で増えて20名を超えることもあったが見えにくいせいも、結局10名程度に落ち着いた。来場者の少ない日に2、3名のが1、2回あったがその方が質疑のやりとりしやすい利点もあった。1時間のはずが毎回喋り過ぎて1時間半以上になってしまうのが通例であった。ガイドする内容は解説パネルを読めば書いてあることが多かったにしても、おおむね好評だったのはすべてをいちいち読むよりは早く全体が回れ、実物を見ることに集中できるからではないかと思う。

アルフレッド・ノーベルについて年配の方に子供の頃伝記を読んで感動したという方が何人かいたのと、女性受賞者のコーナー等でやはり伝記で読んだのかキュリー夫人はどこ?という声が女性に多かったのが印象的であった。賞金額を気にする人、経済学賞をめぐる問題点を気にする人、日本の過去の受賞者が欧米に比べて少なく、どうしたら増やせるのか、環境を改善しないと増えないだろうと言う人、が目立った。

ノーベル賞が科学分野だけでなく、文学賞や平和賞があることが、科学や技術と社会の関係について考える上で役立ち、ガイドもしやすかった。ノーベル賞の100年つまり20世紀は第1次、第2次世界大戦、ベトナム戦争、冷戦、そして21世紀の幕開けは昨年のテロと、人殺しばかりで、この展示とガイドが平和を求めめるささやかな「デモ」になっていれば、と願う。■